

平成19年度 夏季展

「宮本文庫」展

# 大河端村と 浅野川舟運

おこぼたむらと  
あさのがわしゅううん



平成19年7月10日(火)~9月24日(月・祝日)

(「加賀国略図」18.9-5)

玉川図書館 近世史料館

## はじめに

平成19年度夏季展「宮本文庫展 ～大河端村と浅野川舟運～」を開催します。本展では、新たに近世史料館の特殊文庫として加わる宮本文庫を、来年度の一般公開に先駆けて紹介します。

宮本文庫は、宮本登美男氏から金沢市に寄贈された約1,000点の史料からなります。大河端村の肝煎役を勤めた宮本家に遺された古文書の中でも、藩政後期から明治初年頃の大河端村や舟運に関する史料を展示します。

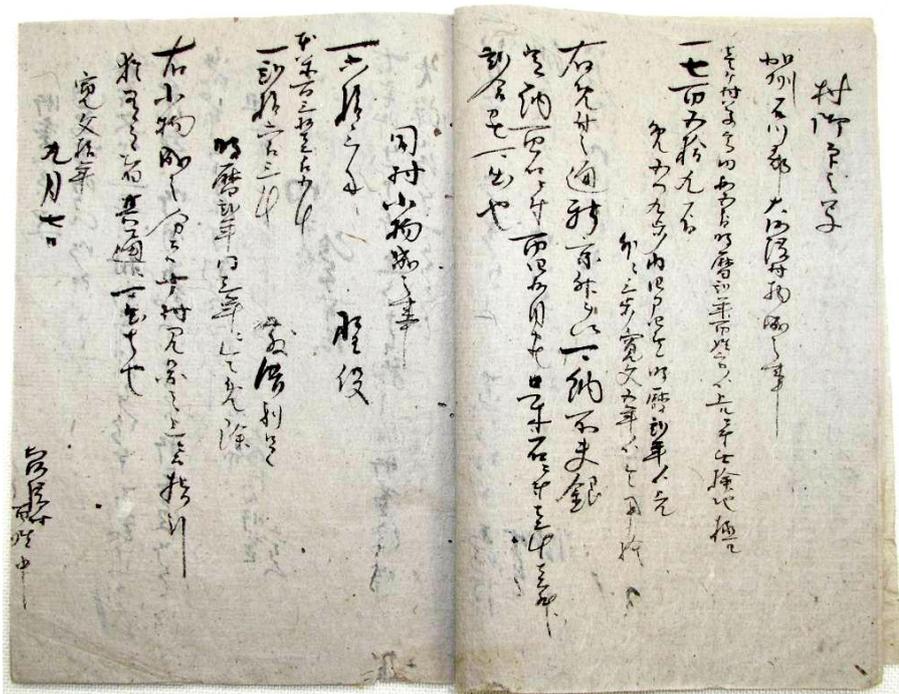
宮本文庫の大きな特徴は、「大河端村と浅野川舟運」と題した通り、従来史料が手薄であった舟運に関する史料にあります。

本展では、その舟運に関する史料を中心に、その他の主な資料を、【大河端村】【宮本家】【御鷹狩と御小休】【浅野川舟運】【地頭割】というテーマを設けて紹介します。参考資料として、当館所蔵の他の文庫資料も併せて展示しました。

## 大河端村（現・金沢市大河端町・湊三丁目）

大河端村は、浅野川下流左岸に位置し、江戸時代は大野湊や河北潟を經由した物資を浅野川の曳舟で金沢城下に運ぶ拠点でした。金沢へ運ばれる諸物資は、大河端村で一旦荷揚げされ、浅野川を通れる川舟に積み替えられ、金沢の堀川揚場まで運ばれたのです。慶応元（1865）年には、藩用・商用舟運の実績を理由に、宿立て願を出しています。また、粟崎道が通り、須崎路への分岐点でもありました。

「加賀国石川郡村誌」によると、大河端村には小舟が104艘あり、農業を生業とする138戸の内、舟稼業を兼ねる家が86戸ありました。また、村内を流れる舟通川は、30石積以下の小舟が通り、大野からの荷物はこの川を遡上し、村内の荷揚場へおろし、浅野川の川舟に積み替えていたようです。

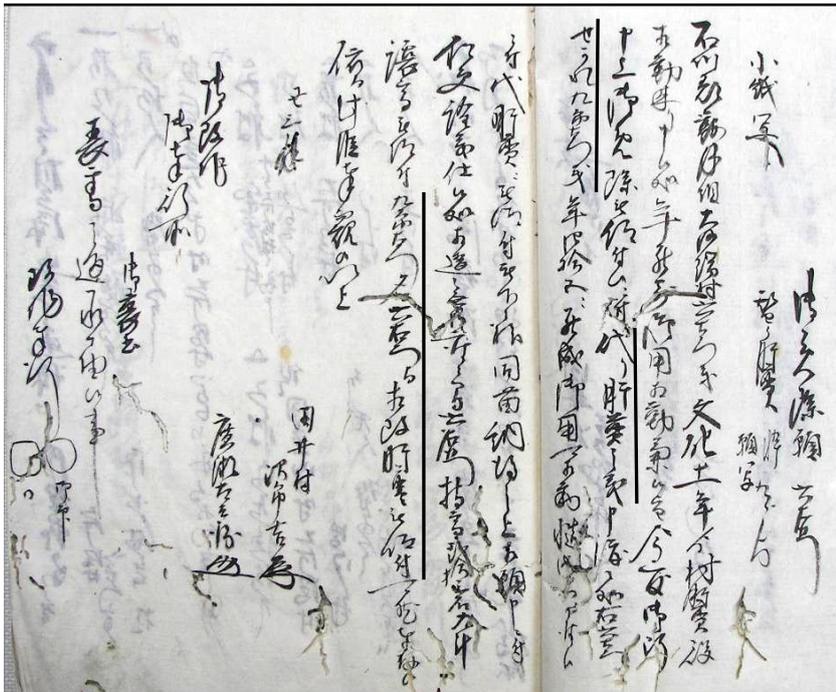
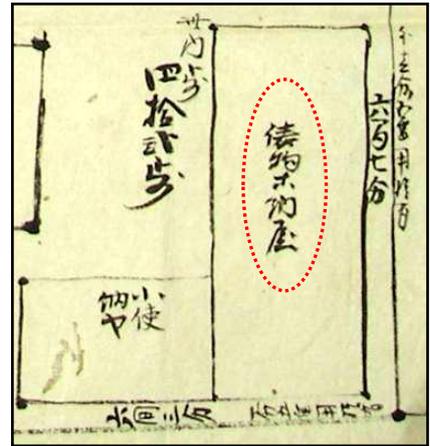


村御印と小物成の写  
（「肝煎職引送ニ付諸帳面等之目録并ニ自分覚」）

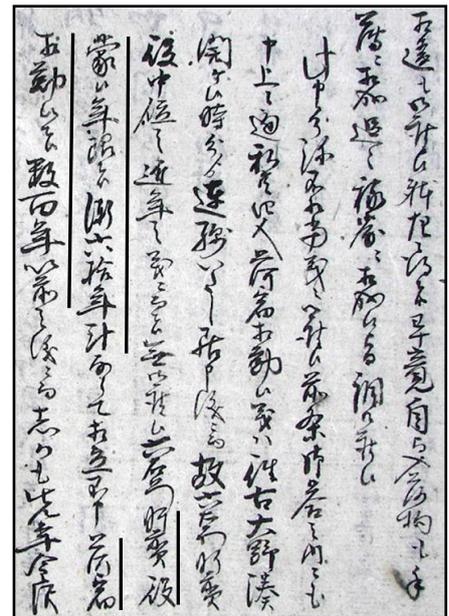
## 宮本家

大河端村に4軒ある荷宿の一で、敷地内には荷揚場と荷を納める蔵や納屋がありました。肝煎役は、文化11(1814)年より六右衛門が勤めており、嘉永6(1853)年には息子の九郎右衛門が跡を継ぎ、名を六右衛門と改めています。宮本家の北には社があり、そのためか、宮下、宮前と書かれた史料もあります。

右図：「俵物等納屋」(「大河端村六右衛門居屋敷図」の北東)

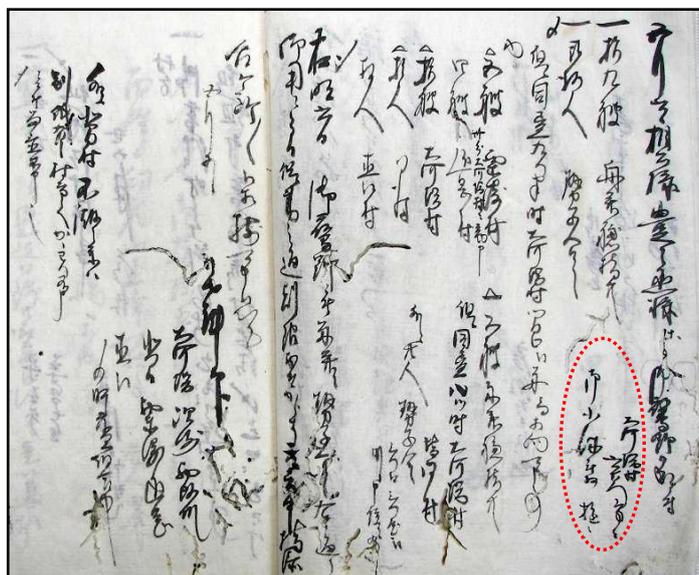


肝煎の代替(「諸事留帳」)



六右衛門家と肝煎と荷宿  
(「組合頭弥右衛門 荷宿加リニ付争論一件」)

## 御鷹狩と御小休



藩主などが鷹狩りや栗崎御旅屋など大河端村の周辺地域へ出行のときには、舟・人足を出すように命じられています。また、その途中に「御小休」・「拵懸(腰掛)」があり、六右衛門の家にも何度か立ち寄った形跡があります。そのとき使われたとされる草履と脇息が伝わっています。御草履は、弘化3(1846)年5月13日に御殿様(第13代加賀藩主前田斉泰)が使用したものと考えられます。

六右衛門家で御小休(「諸事留帳」)

「大河端村六右衛門方ニ 御小休被為遊」

# 浅野川舟運

## 大河端村舟稼の活動範囲

宮腰、大野、粟崎、河北潟の内日角・津幡などから荷物を引請けています。大河端村では、所々から運ばれた荷物が一度荷揚げされ、浅野川を遡れる川舟に積み替えてから金沢の堀川揚場まで運びました。堀川揚場からは陸持で、金沢所々へ荷物を届けるまでが仕事でした(金沢馬借に引き継ぐこともありました)。



「御収納米舟積運送見合札」裏は焼印

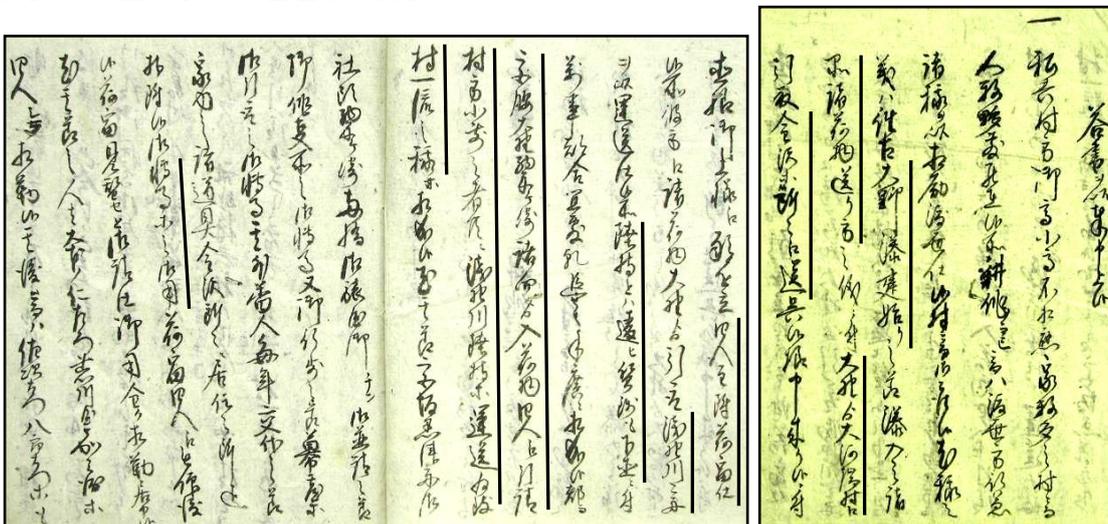
## 何を運んだのか？

運送する荷物は、大きく御用荷物と商用荷物に分けられます。御用荷物としては、材木・米穀(御収納米、藩の御蔵米と給人の知行米がある)・炭(壮猶館御用炭等)・御塩・俵物類などがあります。商用荷物としては、四十物、牧木(薪)などがあるほか、大番荷物(大坂など他国から入ってきた荷物)という分類がありました。

嘉永元(1848)年、御算用場は潟尻川運送の諸荷物を改めるため、粟崎前に番所を立てました。それを受けて、嘉永3年には、御収納米を舟積で宮腰御蔵等へ持届ける潟稼の村々へ、御収納米運送札が渡されています。

## 荷宿、その成立と仕組み

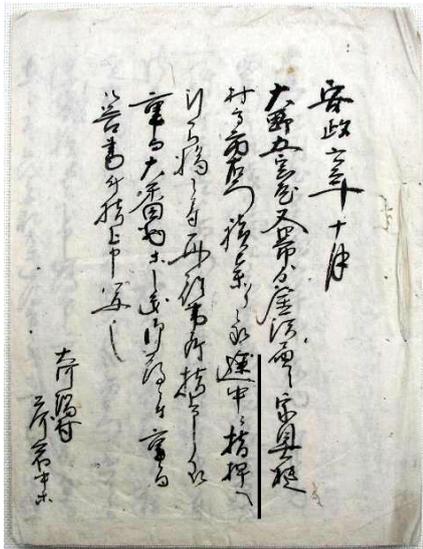
大河端村には4軒の荷宿がありました。大野湊建始の頃、大野から大河端へ諸荷物を引取り、金沢所々へ送るようになるとすぐに藩に願を出し、4人が荷宿に認められました。その見返りとして、粟崎の御旅屋や両橋、黒津舟社の御普請などの際、伝馬御用を勤めたといわれます。荷宿は株立てで、株の譲替により営業者が代わりました。天保6(1835)年には、近岡村の米・四十物等の荷宿の株(2株)を購入しています。藩政末期には、(宮本)六右衛門(大河端村肝煎)・仁兵衛(組合頭)・次兵衛(組合頭)・弥三右衛門(長百姓)が荷宿を勤めていました。荷主からの荷物を荷宿が引請け、荷宿から「村方小前之者共」「下々之者」(頭振など)が金沢までの運送を請負ました。



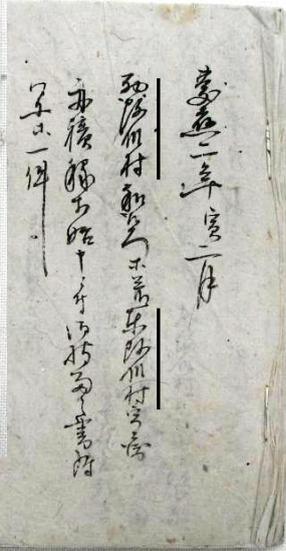
荷宿の始まり、仕組み、荷宿の見返りとしての御用(「組合頭弥右衛門 荷宿加二付争論一件」)

他村との争論 大河端村荷宿商売の既得権保持

争議の原因は、主に商用荷物の運賃を目的とした荷物の取り合いにありました。争議相手には、宮腰町(馬借)、西蚊爪村・東蚊爪村(漕下し舟稼人)、金沢中嶋町・浅野中嶋村人等が見られます。宮腰馬借との争いの大本には、宮腰湊と大野湊の対立がありました。西蚊爪村・東蚊爪村に対しては、両村人が舟積稼を始めたとして大河端村が指留めを求めたものです。堀川場場に近い中嶋町・浅野中嶋村人に対しては、堀川場場から金沢所々へ運ぶ荷物を横取りして「町持(陸持)」しないように求めたものでした。



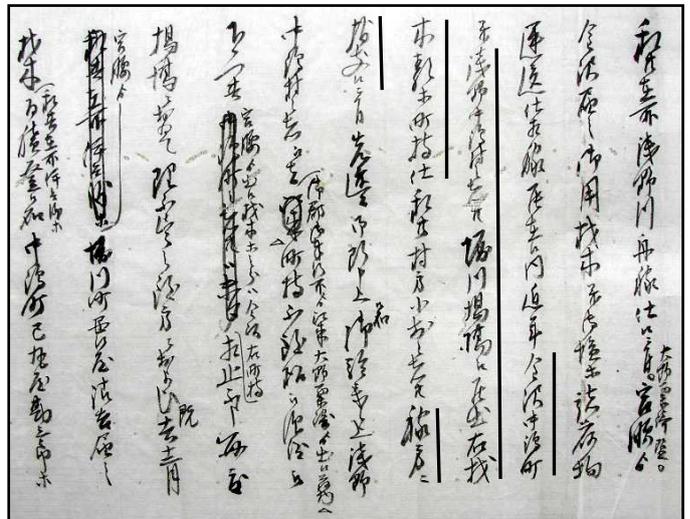
左:「浅の川運送荷物宮腰馬借差押之件ニ付大番物等之義再答書写」



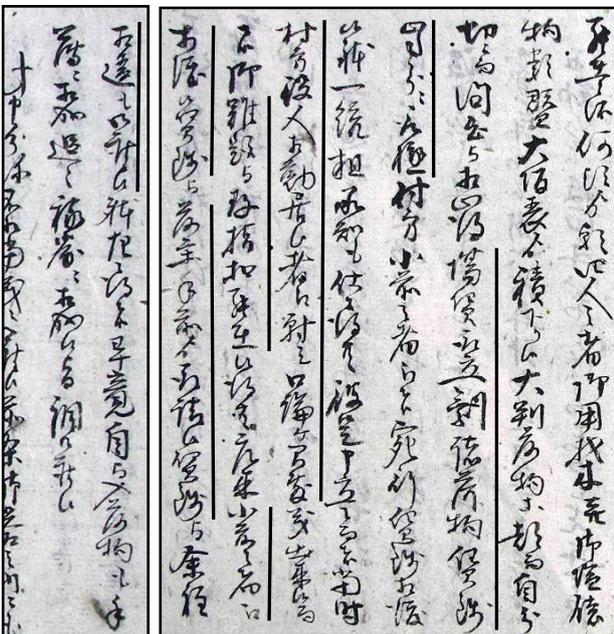
右:「西蚊爪村和左衛門等并東蚊爪村宇兵衛 舟積稼相始申ニ付御指留書付写等一件」

自村内での争論

藩政末期には大河端村内で荷宿の営業をめぐる争論が起きました。慶応2(1866)年から明治2(1869)年3月まで記録が残るその争論は、組合頭の弥右衛門が、米・四十物以外の荷物を荷宿を通さず舟稼人の直対応とすることを荷宿に求めたことが発端でした。要求は聞き入れられず、弥右衛門は荷宿下の舟稼人を引き抜き、荷宿株を取得せずに荷宿営業を始めました。六右衛門をはじめとする荷宿4軒の抗議、十村の詮議の後も弥右衛門は営業を続けたようです。



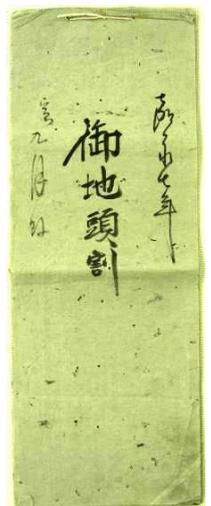
上:「宮腰材木運送稼ニ付町持指止願書」



弥右衛門からの申立(「組合頭弥右衛門 荷宿加リニ付争論一件」)

地頭割

大河端村には、加藤波江(150石)をはじめとする給人が12名程見られます。また、給人と同義に「地頭」という言葉が使われています。一人の給人に対し米を納める村人が数人割り当てられました。給人米は、各給人指定の町蔵に送られました。給人・蔵宿・村民の関係が見えてくる史料です。



「御地頭割」

# 宮本文庫展 展示資料一覽

## \*\*\* 宮本文庫 \*\*\*

### 《大河端村・宮本家》

年 代	資 料 名	形 態
嘉永6(1853)年正月	嘉永五年分算用帳	袋綴
嘉永6(1853)年2月上旬改 年未詳	大河端村六右衛門居屋敷図 宮本六右衛門 宅地等之図	絵図 絵図
嘉永6年正月～文久2(1862)年 明治4(1871)年8月	諸事留帳 肝煎職引送二付諸帳面等之目録并二自分覚	袋綴 袋綴

### 《御鷹狩・御小休》

(嘉永7(1854)年～文久3(1863)年) 寅2月(慶応2年力)	若殿様等 御小休書上 御殿様等 御拵掛・御小休書上	切続紙 切続紙
弘化3(1846)年5月13日 丑 9月18日	御草履 御鷹御用二付舟・人足等達書	草履 切紙
12月晦日 年未詳	筑前守様御小休二付達状 御脇息	切紙 脇息

### 《浅野川舟運》

亥3月(嘉永4(1851)年) 安政6(1859)年10月	浅の川々曳荷物宮腰馬借等指留二付 御詮儀等願状 浅の川運送荷物宮腰馬借差押之件二付大番物等之義再答書写	続紙 袋綴
慶応2(1866)年1月 慶応2(1866)年2月	宿立願書付 写 西蚊爪村和左衛門等并東蚊爪村宇兵衛 舟積稼相始申二付御指留書付写等一件	袋綴 袋綴
寅(慶応2年)4月 慶応2(1866)年6月	宮腰材木運送稼二付町持指止願書 金沢届之諸荷物、前々之通引請二付願書	繼紙 袋綴
慶応3(1867)年6月 明治2(1869)年3月	組合頭弥右衛門 荷宿加り二付争論一件 組合頭弥右衛門 荷宿加り二付争論一件	袋綴 袋綴

\*

天保13(1842)年11月 子 10月22日	金沢蔵宿斗升増御焼印見合札 今石動町蔵米舟積二付申渡書	木札 続紙
丑 11月13日 午	今石動・高松町蔵米舟積二付申渡書 舟調理	続紙 長帳
年未詳	御収納米舟積運送見合札	木札

\* 御用

卯(慶応3年)6月25日 慶応4(1868)年4月	製造所御用聞申渡書 吹炭等値段相場二付買揚願	切続紙 一紙
明治2(1869)年正月 明治2年10月19日	諸役所書上等 御用留帳 上本堅炭等 所口鉄砲局御役所迄運送二付請負願	袋綴 続紙
年未詳	製造所御用札	木札

### 《地頭割》

嘉永6(1853)年正月 嘉永7(1854)年9月	嘉永六年分算用帳 御地頭割	袋綴 長帳
安政6(1859)年分 酉12月	御収納米請取通 借用米年賦払証文	折紙 切紙

## \*\*\* 宮本文庫外 参考資料 \*\*\*

年 代	資 料 名	請 求 番 号
天明(1781～89年)以後 年未詳	宮腰近傍之図 石川郡一町五厘略絵図(「加越能一町五厘略絵図」7枚の内③)	090-344 096.0-267③
年未詳 年未詳	石川郡図 加賀国略図	13.0-116 18.9-5
— 天保4(1833)年	加能越三箇国高物成帳 三州測量図籍 石川郡	16.65-27⑧ 16.20-118③
明治16(1883)年 明治16(1883)年	加賀国石川郡村誌 第十三之巻 加賀国石川郡村誌 第十三之巻	16.60-4⑬ 大友文庫